

34 来日フランス人医師ヴィダールの生涯 フランス側からの報告

清水 陽人・蒲原 宏¹⁾

ガストン・ティシニエ³⁾

オーギュスト・アルマンゴー⁴⁾

ジャン・ポール・イジドール・ヴィダールは、新潟県で近代的医学教育が始まった一八七三(明治六)年、その最初の医学教師として招かれたお雇いフランス人医師である。

一九八一(昭和五六)年、日本側から調査が開始されたが、当時は唯一残っている一枚の写真、その全著作目録、そして極めて断片的な情報以外、全く不明のままであった。

しかし一九八四(昭和五九)年、演者は、オード県カステリノーダリーからとった本人の戸籍原簿、モンペリエ大学医学部博士号証明書、猟歩大隊所属個人調査証明書

及び軍経歴書、レジオン・ド・ヌール勲章授賞タイトル等を頼りに渡仏、生誕地、オード県サル・シュル・レールを訪問。共同演者でもある当地の郷土史家ガストン・ティシニエ、オーギュスト・アルマンゴー両氏の知己を得て、この両氏により、その後詳細な調査が開始され、今日その全貌がほぼ解明され、発表の運びとなった。

ヴィダールは、父母ともにその地方のきわめて旧家の名門の子孫であった。家族には神父が多く、従ってその彼も当然この後を継いで神父になることを約束された。

九歳にしてサン・スタニスラス中等神学校に入学、そこでフランス語、ラテン語、ギリシャ語、英語を学んだ。

神童であった。一八四八年、リール軍医教育病院第二師団で外科医専攻生となり、その後、トゥールーズ大学医学部に籍を置き、精神病院及び市民病院でインターン、平行的に産科学講座に向向、その免許を取得、次いでペルピニャン軍医学校で最終研修を終了し、軍医に昇格した。一八五三年、モンペリエ大学医学部博士号修得、一八六四年、レジオン・ド・ヌール勲章佩用者となった。一八六八年、フランス軍医を突然辞職、理由はパリで生んだ

私生児の発覚だった。一八七二年、来日したヴィダールは、パリ外国人宣教会フェリックス・エヴラール神父の

紹介で私立新潟病院の最初の外人医学教師となった。その時のことを、彼はその著書『日本の医学』で次のように書いている。「:しばらくして日本人が深い考えもなく、講義内容といったものを作り押し付けるといった自惚れた傲慢な固定観念に気付いたので、私は実際次のことを予想せざるを得なかった。彼等はいわば付随的な学問や、もしそれができるなら解剖学によって順を追って事を進めようとする私の目的からほとんど遠ざかっていったのだと。しかしあえて告白するならば彼等が生理学の講義を始めるよう私に要求した時は実際驚いたという他はない。すべてのことについて彼等の習慣に従えば、彼等は最も早く目的に到達することを口実にしてなんと最後の結論から始めることを欲したのでから。私が彼等の要求どおりの大きなばかげたことを教えようとした場合、あるいは生理学の講義であることを理解できる状態ではないということを彼等に説明しても結局はむだ骨であった。すなわち彼等は理学をはじめ、自然科学、解剖

学の生かじりどころか、初等教育すら何ものも受けていなかったのである。」

一八七八年、帰国後、彼は郷里の近く、また終焉の地でもあったマゼール(アリエージュ)に居を構え、田舎医者としての生涯を送った。一八八七年、ヴィダールは死去したが、そのすばらしい墓は今でもこのマゼールに安置されている。ティシニエ氏はその墓を前にして次のように結んでいる。「波瀾に富んだ過去を思うに、ああ何ということだ、このマゼールの墓は。荒廃し荒れ放題。ヴィダールの名前すらない。消えたのか、人々のつれなさか。この荒廃と冷えを思うとき人間の栄光と世俗の名誉の小さなさを深く思わずにはいられない。かつてヴィダールが大きな愛を込めて作ったすばらしい鉄柵の墓は朽ち果てるばかりである。深い悲しみを覚えずにはいられない。人々の無知が、密かにこれを忘却と無知のかなたに追いやってしまった。知るものは、そばにあるただ一本の糸杉のみである。」

- (1) 新潟市、2) 日本歯科大学医の博物館、
3) フランス)